
びー玉の心

崎櫛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

びー玉の心

【コード】

N4980A

【作者名】

崎観

【あらすじ】

過去に別れた恋人へのメッセージ。

(前書き)

幸せな今を生きる中、あの時の彼女からの思いやりを感じる僕から、感謝を込めて…！

『キミからあんな電話がくるなんて考えもしなかった。だってキミから言いだしたサヨナラだったから。』

あんなに大切だったキミがいつからか薄くぼやけた存在になってきて、そのうち僕の中で、ちいさくて綺麗なびー玉のようになっていた。

「彼女ができたんだ！」

僕の些細な一言に、キミはとてもキズツイタんだね。僕が思っていた以上にそのキズは深かった。

キミからの電話を受けた僕に、受話器の向こうのキミの声は重くかすれていた。

「もう電話も手紙もいらんから。さよなら……」

何の言葉も返す余裕はなかった。

2人の糸が切れた瞬間だった。

僕はキミに一体何を求めていたんだろう。

キミは僕に何を？

でも、これだけは確かだ。キミは僕の為にサヨナラを切り出してくれているんだね。

僕が気づれ、キミをびー玉の存在にしまうことにキミは気付いていたから。キミの最初のサヨナラが、こんなに温かい心から生まれていたなんて、びー玉のような僕には、理解るはずもなかったんだ。

めぐみ、本当にごめん。

そして、ありがとう。

あれから僕は、キミに話した彼女と結婚した。

子供も生まれ幸せに暮らしている。』

そこまで書いて、僕は筆を止めた。

この手紙は、僕の心の中に宛てた手紙だから。

もうキミに届くわけではないのだから。

窓の外は静かな雨が降っている。

僕は遠い過去に心だけを飛ばしながら、薄い茶色に鮮やかな黄緑の葉がぽつんと描かれた、僕専用のカップに口をつけカフェオレを飲み込んだ。

(後書き)

初めて書きます。鈍感な男心をそれなりに表現してみました。御感想をお寄せください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4980a/>

びー玉の心

2011年1月27日12時14分発行